

---

**踊る大捜査線×仮面ライダーW THE NOVEL 「Aの転属 / 史上最悪の1週間！」**

grant

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

踊る大捜査線×仮面ライダー THE NOVEL 「A」の転属／史上最悪の1週間！」

### 【Nコード】

N5366M

### 【作者名】

grant

### 【あらすじ】

東京、お台場に位置する湾岸署。

その管内にて謎の暴行事件が多発。

原因不明の幻覚症状を患った人たちが急に暴れだしたというものだ。

その事件にガイアメモリの関連性を見出した警察庁は、風都署にい

る照井を一時的に湾岸署へ転属させる事を決める。

かくして湾岸署の一員になった照井だが、この暴行事件を皮切りに様々な事件が彼らを、そして湾岸署を襲い始める。

こうして照井、青島にとって史上最悪の1週間が幕を開けた！

「踊る大捜査線」と「仮面ライダーW」まさかのクロスがここに登場！

## 0話 プロローグ（前書き）

先に言っておきます。

この作品では東京と風都が同じ日本にあるという設定です。

もし、そういうムリヤリな設定が嫌な人はお帰りください。

それと、物語のベースが「ムービー3」となっております。

ネタバレはしないので安心してくださって結構ですが、もし不安という方は映画を見てからご覧ください。

それでは始まります！

## 0話 プロローグ

「東京」

日本の首都であり、全国48都道府県のなかでもっとも多い約1200万人が暮らす、世界有数の大都会だ。

その歴史は長く、1603年に徳川家康がこの地に幕府を開いたことから繁栄が始まった。

そんな東京には「東京区部」と言う物が存在する。

23個の特別区から構成される地域である。

その23区の一つ、「港区」。

一部が都心地域と副都心に指定されており、東京23区の中央からやや南寄りに位置している。

そしてその港区の一部に「東京臨海副都心」とうきょうりんかいふくとしんが存在し、公式愛称は「レインボータウン」。

またの名を「お台場」と呼んだ。

・ ・ ・ 東京 港区 お台場

この「お台場」の一角に、この地域の風紀と治安を守るために設立

された警視庁湾岸警察署、通称「湾岸署」がある。

7年前には猟奇的連続殺人事件が発生。

マスコミを賑わせたのは鮮明に記憶が残る。

そんな湾岸署の刑事課に、黙々と作業をする男が一人。

座っている椅子の背凭れにはモスグリーンのモッズパーカーが掛けられている。

「……………」

手馴れた手つきで黙々と作業を続ける男。

この男、名前を「青島あおしま 俊作しゅんさく」、警視庁警部補、刑事課強行犯係係長。

元々は巡査部長だったのだが、この春に昇進。

めでたく係長になったばかりなのだ。

「……………」

黙々と作業していた手がピタッと止まる。

そして

「ああ……………!!」

急に発せられる奇声。

ただいまの時間、夜の6時。

まだ他の署員は残っており、青島同様に作業をしていた。

しかし、その奇声により何事？と言う表情をしながら皆手を止めてしまった。

「はあ……」

奇声を上げたあと、すぐに溜息。

手を止めていた署員たちは奇声の主が誰だか分かると「またアイツか」と言うような感じでまた作業に戻る。

「どうして、いつもいつも始末書ばかり……はあ。」

軽く愚痴を言った所で再び溜息。

ちなみにこの青島、組織内部の庇い合いや官僚主義を嫌っており、上からの命令を無視したり、はちゃめちな単独行動をとったりする事もしばしばある為、警視庁一の問題児と見られている。

その為、本庁からは迷惑な存在として煙たがわれる事が多い。

だが、そんな滅茶苦茶な行動を取っていても結果は必ず残しており、仲間からはそこそこ信用されている。

「おわんねえよ……」

始末書と格闘しながら愚痴を漏らす青島。

そんな彼に近づく一人の女性が。

「青島君終わった？」

「え？…いんや、まだまだぜんぜん。」

彼女の名前は「恩田おんだ すみれ」。

青島と一緒に刑事課所属だが、彼女は”強行犯係”ではなく”盗犯係”。

しばしば青島と同じ事件の捜査にあたっている。

「なに、まだ終わんないの？」

彼女が意地悪く始末書を覗き込むと

「仕方ないじゃん。」

子供のように口を尖らせる青島。

「自業自得ね。」

それを見た彼女は呆れたように笑みを浮かべそう言った。

「はあ…」

始末書に再び視線を落とすと溜息がまた漏れた。

そんな時だった。

ビーー！ビーー！

刑事課に備えられている署内放送用のスピーカーからけたたましくサイレンが鳴り響いた。

「警視庁より入電中！警視庁より入電中！お台場海浜公園にて暴行事件発生！被害者は20代女性！署員は至急…」

それは本庁（警視庁）より今起こった事件を知らせる放送だった。

「また!?!」

と驚いたような声を出したのは青島だ。

彼が言った「また」と言うのは、ここ最近このお台場にて謎の暴行事件が多数発生している。

被害者は10代から20代の女性。

付き合っている彼氏とのデート中に、何の前ぶりもなく彼氏が奇声

を上げ女性を襲うと言ったモノだ。

今のところ殺人と言うまでには至ってはいないが、奇声を上げ暴れだした男はいずれも幻覚症状を訴えており、検査をしてもその原因が分からないで居る。

そんな事件がこの一週間で6件も相次いで起こっているのだ。

「最近…って言うか多たってモンじゃないよね？」

一週間に6件は1日1件ペースの勢い。

通り魔にしてはペースの早い行動。

「そんなこと言っていないで仕事仕事！」

「ああ…そうだね。」

格闘していた始末書を一旦机の上に置き、立ち上がるついでに椅子の背凭れに掛けてあったコートを羽織るよつに着ると。

「じゃあ、行きますか！」

青島のその言葉に

「はい！」

と気合の入った返事を上げ立ち上がったのは彼の部下、「篠原夏美」と「緒方薫」の2人だ。

青島が昇進した際、異動によりこの2人が部下として配属された。

「篠原 夏美」は元々岸署交通課に巡査として配属しており、当初から青島と同様に自分の信念を貫いて行動するトラブルメーカーであることから、周囲から「女青島」と呼ばれていた。

「緒方 薫」は岸署地域課所属の巡査部長で、湾岸署の玄関で立ち番をしていた。その後、刑事課強行犯係（見習い）・刑事課盗犯係と転々と移動するが、今回の異動で憧れていた刑事、青島の下で働く事となった。

元気のいい2人を見た青島はニツと笑い、刑事課の出口へと向かう。それに続けと篠原、緒方の2人も続いた。

恩田はその3人を見届けると自分のデスクに付こうとした。

「恩田さあ〜ん！」

刑事課の端にある取調室の方から彼女を呼ぶ声がした。

嫌な予感がしつつもその方を向くと、ボロボロの姿になった一人の男が縋<sup>すが</sup>る様な眼差しで恩田を見つめている。

「さつき捕まえたスリが暴れてて…助けて！」

彼の名前は「森下 孝治」

恩田と一緒に盗犯係に所属する同僚だ。

どうやら先ほど捕まえたスリの男が暴れだし、手に負えなくなったらしい。

「はあ……」

男なのに女に頼るなんて情けない、と思いながら大きな溜息をつき

「今行く。」

渋々取調室へと歩いていった。

……お台場海浜公園

通報のあった「お台場海浜公園」までパトカーを走らせてきた青島達3人。

レインボーブリッジに球体の付いた某テレビ局、都市型リゾートホテルなどを望むことが出来、修学旅行や国内外からの観光客の定番定番コースとしても有名な公園。

夜になればライトアップされたレインボーブリッジを眺める事が出来、デートスポットとしても人気のある場所でもある。

今は夜の7時前。

デート中のカップルと思われる人影がちらほら見えるが、レインボーブリッジや東京タワーの景観を楽しむために作られた展望デッキの近くで、この場に似つかわしくない野次馬による人だかりが出来ていた。

「すみませ〜ん、通りま〜す！」

青島たちはその野次馬の群れを掻き分けていき、目的の場所へと急いだ。

野次馬を掻き分けていくと、彼らを塞ぎ止めている警官の姿が見えた。

「あつ湾岸署のものです。」

警察手帳を見せると警官は青島達を中へと通す。

すると

「離せえ！！殺さなきゃ！！こっちが殺されちまう！！」

いきなり聞こえる怒号。

急な事だったので青島は目をパチクリさせ驚いてしまふ。

声が出たほうを見ると警官2人に押さえられながらも鼻息を荒らげ、血走った目をした男の姿があった。

どう見ても正気の沙汰ではない。

男の視線の先にはうずくまった女性の姿が。

彼女が今回の被害者らしい。

女性を見つけすぐに傍による青島。

その間後ろでは男が狂ったように、あの女は悪魔だ！あいつを殺さなきゃ俺が食われてしまう！など、意味不明な事を叫び続けている。

2人で止めに入っている警官たちは必死で男を止めている。

見るに見かねた青島は

「ちょっと頼んでいい？」

後ろに居た緒方にそう頼み込む。

暴れている男を止めるのに加担して来て欲しいと言う合図だ。

緒方は柔道三段という有段者で、他にも剣道、合気道、空手、ボクシング、短距離走、バドミントンが特技と言うスポーツ万能な刑事だ。

それゆえこういった力仕事は彼の得意分野でもある。

青島の言った言葉の意味を理解した緒方は

「はい！」

と返事をし、男の元へと向かっていく。

「さて」

緒方が男の元へと向かうのを見ると、次は被害者の女性へと目を移す。

「大丈夫？」

女性の前へしゃがみ込むと優しく声を掛けた。

「あゝ、凄い痣。腫れてるねえ。」

彼女の頬は強く殴られ、青く痣になっている。

「なんて酷い事するんだ。」

被害にあった女性は顔立ちのキレイな普通に立っていても声を掛けそうなくらいに可愛い顔立ちをしている。

そんな顔に青くそして大きな痣。

いくら幻覚を見ている、ここまでした加害者の男が許せなくなってきた。

「とりあえず、手当てして…それから事情聴取だね。篠原さん。」

近くに居た篠原を呼びつける。

「はい」

「悪いけど、この子の事お願いできる？ほら、救急車来てたでしょ。そこまで連れて行ってくれない？」

この騒動で近くに救急車が着ていた事を思い出した青島は、女性をそこまで連れて行ってくれる事を彼女にお願いする。

「分かりました。」

篠原は軽く頷くと、女性を連れ救急車の所まで連れていこうとする。

その時だった。

「ん？」

急に青島が周りを伺うような行動を取り始めた。

「どうかしたんですか？」

まだ近くに居た篠原がそれに気付き尋ねてくる。

「いや…今、”鈴”の音聞こえなかった？」

彼の耳には一瞬だが”鈴の音”がハッキリと聞こえた。

現場の周りには未だに野次馬が屯しており、もしかしたらその中の人間の所有物かもしれないのだが。

しかし、野次馬の喧騒とした中、鈴の音が聞こえるのかと少し疑問に思う。

「いえ、しませんでしたよ。」

篠原の耳には届かなかったようだ。

「?…あつそう…んじゃ、気の所為かな？」

首を傾げる青島。

「ねえ、君”鈴”持ってない？」

一応、被害にあつた女性にも聞いてみる。

彼女は首を横に振り、持っていないと答えた。

「そつか…ごめん、ありがとう。」

未だにざわめいている野次馬に目を移す。

鈴の音は気の所為と自分に言い聞かせるが、どうも気になってしまった青島。

刑事の勘と言う奴なのか、気になりながらもその場を後にした。

…次の日 中央合同庁舎第2号館

第7の暴行事件が発生した次の日。

中央合同庁舎第2号館内にある、警察庁。

その警察庁の円形に机が並べられたとある会議室に「警察庁長官」を始めとする、「警察庁次長」、「官房長」、「審議官」、などの人たちが集まっていた。

薄暗くシンと静まり返った会議室。

その重々しい空気は何ともいえない状態であった。

そしてその空気を切り裂くかのように一人の男が口を開いた。

「このところ、管内にて謎の暴行事件が絶えない様だが…」

口を開いたのは「池神警察庁長官」だ。

蛇のようにねちっこく陰険な警察高官で、監察では所轄のことを低く見ており上層部には手心を加えている人間だ。

今回の会議はどうやらお台場周辺で連続で起きている例の暴行事件についてらしい。

一見、官僚が関わるような事件ではないのだが。

「確かに、あの事件にはおかしな点が多い。実際、幻覚症状は起きていても、加害者からは薬物反応は見られず、未だ幻覚症状を起こし続けた状態だ。」

次に口を開いたのは「町屋警察庁次長」。

警察官僚の中でも、現場に理解を示す数少ないタイプの一人で、かつて湾岸署で起こった籠城事件では警視庁警備部長としてSATに

突入を指示し、警視庁刑事部長時代には、当時の交渉課準備室に人員増加を許可したのも町屋である。

「下手にマスコミに知られてしまったては混乱を招く可能性がある。今は何とか報道に規制をしているが…」

と言ったのは池上。

原因不明で幻覚症状を起こし、人を襲ったと言う事が民間人に知れ渡ればそれこそ、謎のウイルスだのとまくし立てる輩が現れ、混乱を招く可能性がある。

そうならないため、警察庁は先にマスコミに対して規制を張り、原因が分かるまで間違った報道をしないようにした。

だが、それがいつまで持つかは分からない。

いくら報道を規制しても、今はネット社会だ。

現にちらほらと某有名なネット掲示板を始め、色々な場所での事件について様々な見解を書き込んでいるモノが多い。

「最初はここまで大きくなるとは思わなかった…」

「だが、このまま放って置くわけには行かない。早急に原因を突き止めなければ！」

各官僚が声を荒らげ始めた時だ。

「…私に一つ思い当たる物があります。」

会議室に集まっている各官僚が色々と意見を述べている中、ずっと黙ったまま見続けていた男がようやく口を開いた。

「室井<sup>むろい</sup> 慎次<sup>しんじ</sup>」。

「警察庁長官官房審議官」で東大卒者が圧倒的に多いキャリア組の中で、東北大卒であるが故に波乱の出世街道を歩む警察官僚で、「湾岸署」にいる青島のよき理解者である。

東北出身のため時折、秋田訛りが出るのが特徴だ。

管理官時代は所轄「湾岸署」と衝突する事が多かったが、青島との出会いを通じて所轄が捜査に専念できる警察組織の改革を勧める事を決意し、青島と約束を交わす。

5年前には警視庁と警察庁の権力争いに振り回された結果、降格処分分で広島に飛ばされるも池上警察庁長官により警察庁長官官房審議官と復帰し今に至る。

「室井君、思い当たる物とは？」

池上が怪訝な表情をして尋ねてくる。

それに室井は険しい顔を崩さずに

「皆さんは……」ガイアメモリ」と言う物をご存知ですか？」

ガイアメモリ。

その言葉を聞いた官僚達は何だそれは？とざわめきが起きる。

「何だね？その”ガイアメモリ”とは。」

池上がそのざわめきの中、尋ねてきた。

この状況で出してきた名前。きっと何かこの事件に関わる物なのだろうと期待をしているらしいが。

「ガイアメモリとは、USBメモリのような形をしたモノでそれを体に使用する事により、超人的な力を得ると言った物です。」

室井の言葉に会議室はシンと静けさを取り戻す。

「超人的な力とは…具体的にどういったことなのかな？」

再び池上が尋ねる。

「…体から炎を出したり、鉄のように硬くしたり」

室井がそう答えるとその瞬間、今度は会議室が大笑いの声で響き渡った。

「室井君、ここは子供の発表の場じゃないんだよ？」

馬鹿にしたように官僚の一人が笑いながら答えた。

「この状況で何を言い出すのかと思えば」等と他の官僚からも馬鹿

にした答えが返ってくる。

そんな中でも室井は真面目な顔で口を真一文字にギュッと閉じ、机の上に手を組み座っている。

「室井君、君はそんなオカルトを信じているのかね？」

池上也馬鹿にしながら室井に言い放った。

だが当の本人は

「オカルト？信じてる？いいえ……」

首を静かに横に振る

「では何だというのかね？」

今度は町屋だ。

「…私は、実際にその”ガイアメモリ”をこの目で見ました。”風都”という街で。」

「風都？風都とは…あの風都かね？」

町谷がそう尋ねると。

「はい、あの風都です。」

彼は静かに頷いた。

## 1 週間後

- - - 風都

場所は変わり、ここは東京から遠く離れた都市「風都」。

街のあちこちで風車が回り、「エコの街」としても知られているところだ。

そんな風都の一角にある探偵事務所「鳴海探偵事務所」。

その事務所の奥にあるデスクに一人の青年がコーヒーを啜りながら、本を片手につかの間の休息を楽しんでいた。

彼の名前は「左<sup>ひだり</sup>翔太郎<sup>しょうたろう</sup>」。

この「鳴海探偵事務所」に所属する探偵である。

「やっぱハードボイルドはコーヒを片手にレイモンド・チャンドラーのハードボイルド小説を読む。コレに限るぜ。」

ちなみに「自称」ハードボイルド」だ。

そんな翔太郎の様子を見ながら机に突っ伏している少女が一人いる。

彼女の名前は「鳴海 亜希子」。

この「鳴海探偵事務所」の初代所長「鳴海 莊吉」の娘で2代目所長兼オーナーだ。

歳は二十歳だが、子供っぽい外見から翔太郎達によく「女子中学生」とからかわれる事がしばしある。

「依頼来ないなあ〜」

ウエザードーパントこと「井坂 深紅郎」を倒して以来、事務所に依頼は一切ない状態が続いている。

亜希子の愚痴を聞いた翔太郎は

「いいじゃねえか。それだけこの街が平和な証拠だ。」

と呑気な事を口にする。

すると

「そうでもないよ。まだミュージアムの件が残っている。」

事務所の壁にもたれながら、パーカーのフードを深く被り、何も書かれていない本をペラペラと捲る青年の姿があった。

彼の名は「フィリップ」。

翔太郎の相棒で、地球の全ての知識を持っており「地球の本棚」に入ることによってその全てを閲覧する事が出来る。

調べる事が趣味で暴走する事もしばしばある。

そして、この翔太郎とフィリップはダブルドライバーと純正ガイアメモリを使うことで、風都を守るヒーロー「仮面ライダーW」に変身する事が出来るのだ。

「それもそうだが、今のところミュージアムに関する情報は一切なし。ウオッチャマンやサンタちゃんに聞いても何も得られないからな……」

「ミュージアム」と言うのは、この風都に危険を脅かす存在「ガイアメモリ」を作り出し、街に放出する秘密結社だ。

翔太郎、そしてフィリップはそのミュージアムの野望を阻止するべく「W」に変身し、日々戦っているのだ。

「僕も色々検索をかけているが、ミュージアムに関する事は地球の本棚にはない。もっと何か情報があればいいんだけど……」

フィリップが深く被ったフードから顔を覗かせ、そう愚痴るように言った。

「ミュージアムもいいけど依頼だよ…」

真剣に話し合っている翔太郎達とは裏腹に、亜希子は依頼の事ばかり考えている様だ。

そんな時、事務所の扉が開く音がした。

「あつ！お客さん！」

亜希子はようやく待ち焦がれた客と思いい扉の方へ振り返る。

が

「照井じゃねえか。」

扉から入ってきたのは風都署の超常犯罪捜査課（主にガイアメモリ関連事件の捜査を担当）に所属する「照井 竜」だった。

「なあ〜んだ、竜君か…」

期待していた人物とは違い、ガツクリと肩を落とす亜希子。

「アキちゃん、それじゃ照井 竜がかわいそうだよ…」

流石にそれはないだろうといった感じで亜希子に言い放つフィリップ。

「それより照井どうした？」

事務所に入ってきた照井の様子いおかしい事にいち早く気付いたのは翔太郎。

照井は目の下に隈を作り、若干やつれた表情になっている。

まさに”どよ〜ん”とした擬音がふさわしい状態だ。

「そういえば確かに、いつものクールさが欠けているね。」

フィリップも気付いたらしく声を掛ける。

すると

「左、フィリップ、所長……短い間だったけど世話になった。」

「「「は？」」「」」

珍しくフィリップまで間抜けな声を出してしまった。

「一体、どうしたんだ？」

「そつだよ。いつもの君らしくない。」

「何か相談があるなら聞いてあげるよ？」

流石にコレはおかしすぎると感じた3人はそれぞれに声を掛けてい

く。

すると照井は重くなっていた口を開き

「実は…東京に異動が決まったんだ。」

「「「はあ!？」」「」」

再び間の抜けた声を上げる3人。

「異動って…まだミュージアムの件終わってないだろ？」

「…ああ。」

翔太郎の言葉に言葉少なく頷く。

「一体何があつたんだい？順を追って聞かせてくれないか？」

「…ああ」

また言葉少なげに頷き。

「実は昨日、風都署で署長に呼び出され…」

…前日 風都署 署長室

「わざわざすまないね、照井君。」

この日、風都署の署長に呼び出された照井は署長室に赴いていた。

「いえ」

「まあ、掛けたまえ。」

照井は言われるがままに部屋にあったソファーに腰を掛ける。

「それで、話と言つのは？」

腰を掛け、すぐに用事を聞き出そうとするが

「……」

署長は黙ったまま、照井は一抹の不安を感じてしまう。

「実は……」

ようやく重い口を開いた署長。

「君に転属の辞令が出そうなんだ……」

「は？」

思わず間の抜けた声を出してしまう照井。

それもそのはずだ。

いくら井坂を倒したからと言って、まだミュージアムの件が残っている。

ガイアメモリを作り出し、世に送り出している組織。

この組織がガイアメモリさえ作らなければ自分の家族もあんな目には遭わなかった筈。

最近はそのなことまで考えるようになっていた。

「ちょっと待ってください！」

いつもならクールに事を受け止めるが、今回はかりはそうも行かない。

「俺にはまだこの街でやるべき事がたくさん残っているんです！それを放つて置いて他の場所に移動するなんて考えられません！」

ソファアの前においてあるテーブルにバンツ！と手を突き詰め寄る。

「君の気持ちは分かる。実際この街はまだガイアメモリと言う存在から開放されてはいない……」

照井の剣幕にタジタジの署長。

「だけど照井君。コレは上からの指示なんだ……」

「上？」

「上」と言うワードが引つ掛かった照井はオウムのように聞き返す。

「うむ、実は池神警察庁長官の指示でな…」

「池神警察庁長官!？」

いきなり警察庁トップの名前が出て、流石の照井も驚いた様子だ。

「なぜ警察庁長官が俺の名を？」

「実はな…」

どうも切り出しにくくなった署長は、言葉を詰まらせながらも照井に事実を話していく。

「東京のお台場で、ガイアメモリと見られる事件が相次いで起こっているらしいんだ。」

「東京でガイアメモリ!？」

驚きが隠せない。

と言うのも今までガイアメモリが風都以外の場所で確認されたことは一度もない。

ましてや遠く離れた地、東京でもだ。

それが今回初めて風都以外の場所で始めて確認できたと言う事に、

照井は少し焦りを感じた。

「今のところガイアメモリと見られるって言うだけで、本当にガイアメモリかは分からない。」

「それで？」

「今回君にはそれがガイアメモリであるかどうか確認してきて欲しいと言う事だ。君はこの署でも超常犯罪捜査課に所属しており、ガイアメモリのエキスパートだ。それを聞いた池神警察庁長官がそれならと言う事で君を指名したらしい。もしガイアメモリでなかったら、そのままこの署に戻ってきてても構わない。もしガイアメモリであれば、その事件を解決してきて欲しい。」

「…戻ってきてても構わない？」

ガイアメモリの話云々よりも、その部分に食いついた。

「ん？まだ言っていなかったかな？君の転属は一時的なものだ。目的が終わり次第帰ってきて言いそうだ。」

それを聞いてガクツと肩を落とす照井。

正直先に言っていなかったと内心思ってしまった。

「しかし、俺が出て行って大丈夫ですか？残るのは刃野刑事に真倉刑事ですよ？」

流石にあの2人だけで超常犯罪捜査課を任せるのは厳しい、むしろ自分よりあの2人の方が適任なのではと思うのだが。

「上からの指示だ。コレばかりは…」

と申し訳無さそうに言ってくる。

署長なりにも苦勞があると言った所だ。

しばらく考える照井。

事件が解決し次第戻っていいというのは条件的に良いので、受けるのは構わない。

しかし、受けてしまえばこの風都を守るのは翔太郎とフィリップの二人だけ。

今はガイアメモリの動きも激化おり、W 一体だけでは何かと不安だ。

かといって東京のガイアメモリを放って置く訳にも行かない。

悩みに悩む照井。

時間は刻一刻と過ぎていく。

「照井君。」

焦らせるように署長が声を掛けてくる。

正直黙っていて欲しい物だと照井は思う。

再び悩みだす照井。

そしてしばらく経った時だ。

照井の表情がよっ！と決意に満ちたモノへと変わる。

「…署長、決めました。行かせて貰います。」

「照井君！」

「ですが、これだけは守ってもらいます。事件が解決し次第、必ずこの風都署へ戻してください。風都には、まだやり残した事がたくさんあるんで。」

照井が出した条件に

「分かった。私から掛け合ってみよう。ありがとう、照井君。」

署長は照井との約束を交わし、ホツとした安堵の表情を浮かべた。

その表情から察するに、上からの圧力があつたと思われる。

「正式な辞令は明日出ると思う。今日のうちに持っていくものを整理しておいてくれたまえ。」

「…わかりました。」

照井は小さく頷くと署長室を後にした。

署長室を出て扉を閉めるとハアツと短く溜息をついた。

「転属か…」

……鳴海探偵事務所

「と言っのが概要だ。」

一通りの説明を終えたため息をつく。

「なんだ、異動って言っからもう戻ってこないかと思ったら、そうでもないんだな。」

と軽い口調で言ったのは翔太郎。

「そうだね、戻ってこれるなら心配はない。頑張ってきてくれ。」

と今度はフィリップが応援を含め彼を励ますように言った。

「ところで竜君。何でそんなにやつれたの？戻ってこれるなら良かったんじゃない？」

と疑問を投げかけてきたのは亜希子だ。

「やはり、直前になって心配になって来たんだ。最近ガイアメモリの動向が激しくなっっていくばかり。お前達だけで大丈夫かと…」

すると、それを聞いた翔太郎が

「ふっ、何だそんなことか。」

と照井の心配を一蹴するかのようには答えてきた。

「安心しろ。元々この風都は俺たちだけで守ってきてきたんだ問題はない。それにお前だってすぐに解決して戻ってくるんだろ？ だったら大丈夫だ。心配しないで胸張って仕事して来い！」

後ろから後押しするような激励。

「もし、あつちで事件に詰まるような事があつたら、遠慮せずに僕に連絡をくれ。そうすれば地球の本棚を使って君の仕事のサポートをしてあげるよ。」

今度はフィリップからの激励。

「大丈夫、私も応援してるからね。あつ、戻ってくる時は絶対お土産買ってきてよね！」

続けるように亜希子からの…激励？

「なら僕は”人形焼”を買ってきて欲しいな。前一度だけ検索した事があつて、一度でいいから食べてみたいと思っていたんだ！」

若干興奮気味のフィリップ。

「じゃあじゃあ！ 私は”ドラ焼き”を！ 浅草に、おいしいドラ焼き屋さんがあるの。買ってきて？」

照井の口からは買ってくるとは一言も言っていないのだが、続けるように亜希子が自分の欲しいものを告げた。

「じゃあ、俺は……アキバのメイドさん、かな？」

「……………」

翔太郎の一言にその場の皆がドン引き。

「な！冗談に決まってるだろ！」

と慌てて誤解を解こうとするが

「翔太郎君の場合嘘には聞こえない……」

亜希子がジト目で翔太郎の事を睨みつける。

「馬鹿！…照井、俺は土産いいからな。」

「珍しいね。」

翔太郎の性格ならここで土産を欲しがるはずなのだが、珍しく欲しがない。

そこをフィリップが指摘すると

「まあな。照井、お前さえ無事でいてくれれば立派な土産さ…ちやんと帰って来いよ。」

いつもと変わらないハーフボイルド振りを発揮する翔太郎。

それを見立てるいは自然と笑みがこぼれる。

「ああ、絶対に帰ってくる。」

決意に満ちた表情。もう何も悩む事はなくなったらしい。

それを見た翔太郎達もホツとする。

「さあ、照井。もうじき時間だろ？行って来い！」

「ああ。お前達も無事で居ろよ？」

「分かってるぜ。」

「それじゃ。」

別れを済ませると、事務所の扉を開けその場を後にした。

「照井：ガンバレよ。」

・・・風都署 署長室

翔太郎達と分かれた照井は真っ直ぐ風都署の署長室の前へ来ていた。

コンコンッ！

署長室の扉を2回、リズムよくノックする。

「どござ

中から署長が声を掛けてきた。

「失礼します！」

扉を静かに開け中に入る。

すると署長室には署長ともう一人、スーツ姿で顔の険しい男が一人ソファ―に座っている。

「照井君よく来てくれた。」

「この方は？」

照井はその男が気になったらしく署長に尋ねた。

「この方は……」

「いい、私自身で話そう。」

男は署長が紹介しようとしたのを止め、ソファ―から立ち上がり自ら自己紹介を始めた。

「初めまして、照井警視。私は”室井 慎次”警察庁長官官房審議官だ。」

「官房審議官！？何故官僚がここに？」

官僚である室井がこの場に居て驚きが隠せない。

「君を…迎えに来た。」

「俺を？」

「そつだ、話は聞いているはずだ。」

「東京への転属の話ですよね？」

室井は静かに頷きソファアに再び座る

照井もそれに合わせ対面するように座る。

「まず、君が配属になるのはお台場にある”湾岸署”だ。」

「湾岸署？所轄：ですか？」

「そう、今この管内にて謎の暴行事件が多発している。我々はこの事件にガイアメモリの関連性を見出し、エキスパートである君に着目した。」

そついいながら照井に一つの資料を手渡す。

今までの事件の加害者、被害者、起きた日時、場所など詳しく書かれた資料だ。

「突然発狂し、女性を殴打…幻覚症状…原因は不明…なるほど、言われて見れば確かに。」

資料をざっと閲覧し感想を述べる。

「どうだ？」

「コレだけでは何ともいえません。実際見てみないと。」

「そうか。今のところ殺人までには至っていない。だが、もしガイアメモリなら、殺人にいたるのも時間の問題だ。そう急に片をつけて欲しい。出来るか？」

「もちろんです。自分も早くこの風都署へ戻りたい。早急に片をつけてやりますよ。」

照井は得意そうにニツと笑いそう言った。

「頼もしい答えだ。準備は出来てるんだっただな？」

「ええ」

「では、急ごうか。これ以上、被害を拡大させないためにも。」

「はい」

室井がソファから立ち上がると照井も合わせて立ち上がる。

「それでは署長、照井警視を借りていくぞ。」

「はい！」

署長はビシッ！と室井に対して敬礼。

「照井君。頑張ってきてくれよ。」

「分かりました。それでは行って来ます。」

署長に軽くお辞儀すると室井と一緒に部屋を後にした。

「外に車が止めてある。」

「はい…ん？」

出口へと向かう廊下、そこで彼は見慣れた人物を見つけた。

「「照井警視！」」

それは照井の部下である、「刃野」と「真倉」であった。

「お前達…」

「照井警視！警視、貴方がいなくなっても、我々だけでこの風都を立派に守って見せます！」

「ですので、安心して仕事してきてください！」

敬礼しながら照井を見送る2人。

真倉に関しては涙を流している。

「…すぐに戻る。それまで、超常犯罪捜査課を任せただ。」

「「はっ！」」

2人は再び力強く敬礼をする。

「行ってくる。」

「「行ってらっしゃい！照井警視！」」

見送る2人を背に、照井は風都署を後にした。

「いい部下を持ったな。」

室井は2人を見てそういつたが、照井はフツと笑い

「部下？自分に部下は居ません。居るのは仲間だけです。」

「…そうか。」

照井のその言葉に、室井はある男の面影を重ね合わせてしまった。

その男はやがてこの照井と会うであろうあの男だ。

「東京」

それは照井にとっては初めての勤務場所。

果たして、この場所で彼を待ち受けているものとは。

そして、湾岸署で待ち受けている新しい仲間とは。

今の彼に知る予知もなかった。

う  
く

## 0話 プロローグ（後書き）

青島「照井君！事件は”風都”で起きてるんじゃない！”お台場で起きてるんだ！”

照井「なん…だと…？」

というわけで、初めましての方は初めまして。久しぶりの方は久しぶりです！

どうもgrantです！

先に言っておきますが、この作品は不定期作品です。

主に更新するのは「ディケイド」と「Win 学園都市」の2つがメインです。

いつ更新するかは活動報告ですのでご確認ください。

さてさて、本題ですが…ごめんなさい！

先に謝っておきます！踊るファンの方ごめんなさい！

レイプしてしまいました…。

少しキャラがおかしくなっているかもしれないが、なにとぞ多めに。

それでは今回の作品について少し説明を。

この作品は、「踊る大捜査線」×「仮面ライダーW」ということでやって行きたいと思います。

前書きにも書きましたが、この世界では東京と風都が一緒にある世界という設定で書いていきます。

そしてそれ故におかしくなっている所があります。

どこだか分かりますか？

どうですかね？結構というかなかなり初めの部分なんですが。

ではここでネタ晴らし！

おかしい部分というのは一番初めの部分で東京の説明があるかと思えます。

そこで「48都道府県」ってなっていると思います。

頭のいい人はお気づきかと思いますが、これは間違いではありません。

通常は「47都道府県」なんですが、この小説ではあえて「48都道府県」にしました。

なぜか？

それは「風都」を一つの県としてこの物語を進めるためです。

本編内での風都がどのような定義なのかは分かりませんが、この小説では一つの県、一つの都市として扱いますのでご注意ください。

ですので、この世界では「2」都1道2府43県」となります。

細かい事は気にしない！

それともう一つ、これも前書きに書きましたが、この小説の「踊る大捜査線」は「ムービー3」の設定を使っています。

と言っても、ムービー3の話よりも3ヶ月前の話となっております。  
ですので直接的なネタバレにはならない予定です。（3ヶ月後とか  
だったらネタバレが含まれたかも）

それゆえ、青島や室井さんが昇格してたりと「テレビシリーズ」や、「ムービー1、2」とは若干設定が異なる部分があるのでご注意ください。

もし分からなければ映画、見てください！

後もう一つ。

この作品では仮面ライダーによるアクションシーンはかなり少なく

考えております。

ここで言うのもなんですが、この作品のテーマは「照井の刑事らしい姿」です。

ドーパントに関しても1体がメインとかなり少ないです。

基本的に起こる事件は人間たちの手によるものです。

その辺をご注意ください。

では、また次回。

説明部分、結構省いてるんですけどもしアレでしたらwikiを…。

1話 Tの到着／湾岸署と最初の事件（前書き）

はいどうも。

大変お待たせいたしました。

第1話、満を持しての投稿です！

# 1話 Tの到着／湾岸署と最初の事件

- - - 2010年3月21 13:00 首都高速

ここは風都からお台場に行く首都高速。

そこに名物と化した渋滞に捕まった一台の黒塗りの車が。

その車内には長く続く渋滞にいい加減飽き始めた照井と、風都までわざわざ迎えに来た室井が、いつもどおり顔を強張らせながら乗っていた。

「噂には聞いていたが、ここまで酷いとは…。」

いい加減辛くなり、溜息交じりに照井が言った。

かれこれ一時間以上この渋滞に捕まっている。

流石の照井もお手上げといった所だ。

「後もう少しだ。我慢してくれ。」

隣に座っていた室井が久々に口を開いた。

さっきから何度も言葉を交わしてはいるが、どれもすぐに話が終わってしまう。

2人の性格がアレなので長く続かないのも分かる。

ただ、唯一長く続いた会話があった。

それは以前に室井が風都に訪れた事があるというものだ。

そして、そこで彼は始めてガイアメモリという存在を知ることとなる。

今から数年前。

丁度、風都署がリニューアルされ、その開署式に出るために赴いた。本来なら別の人間が行く予定だったが、当日に別件の用事が出来てしまい代わりに、当時まだ管理官だった室井が選ばれた。

開所式は予定通り行われ、無事終える事となる。

が

その帰り道、彼の乗った車は謎の強い衝撃と共に横転。

体を引き摺るように車から這い出ると、彼の前には見たことの無い異形の姿が。

最初室井は何かの悪戯の悪戯に巻き込まれたのかと思ってしまった。

だが次の瞬間、相手の拳が室井の腹に入る。

人間とは思えない力に室井の表情は歪んでしまう。

そして嘔せ返る。

その時彼は確信した、”これは人間ではない”と。

相手が室井に止めを刺そうとしたときだった。

数発の銃弾が異形の怪物を襲う。

銃弾が放たれた方を向くとそこには、黒と銀を基調とし、頭にはソフト帽を被り、顔はまるでドクロのような、そんな姿の男が立っていた。

その男はすかさず持っていた銃にUSBメモリのようなものを差込み

「スカル！マキシマムドライブ！」

そのまま異形の姿の怪人を狙い打った。

狙い撃たれた異形の怪人はそのまま悲鳴を上げ、なんと人間の姿になっってしまった。

さっきまでの異形の姿が人間だった事に室井は驚いた。

助けてくれた男に礼を言い、さっきの出来事は一体なんだったのか問う。

しかし、男は

「お前さん、風都の人間ではないだろう…なら、知らないほうが良

い。いや、知ってはダメだ。これはそう言うモンさ。」

男はそう言うのと被っていたソフト帽を深く被り直し、近くに止めてあったバイクに跨り、そのまま走り去ってしまった。

室井はその姿を呆然と見送り、あの男は何者なんだ？と疑問に思う。それから数日経ち、東京に戻った室井は独自の調べで怪物の正体が”ガイアメモリ”で変身した”ドーパント”という存在だという事を突き止める。

同じ日本、同じ空の下の国にこんな恐ろしい物が存在していたとはと室井は驚きが隠せなかつたと語った。

照井はその話を聞き、ガイアメモリ云々よりも仮面ライダーの話に興味を湧いた。

自分の”アクセル”や翔太郎とフィリップの変身する”ダブル”の他に仮面ライダーがいた事に。

車は依然、渋滞に捕まっただまじわりじわりと前に進むだけだ。

その車中、照井はさっきの話を思い出しながらボーッと窓から車の外を眺めている。

車はもう東京の都心近く。

遠くには名所の一つ”東京タワー”が望める。

そして高速道路の周りには背の高い高層ビル。

まさに大都会。

彼は物珍しいのか、そういったビルを眺めている。

そんな彼に、不意に室井が声を掛ける。

「照井警視」

「？」

相変わらず険しい表情。

何も無くてもこの表情なので、照井も少し掴み取りにくい部分がある。

「なんですか？」

「もうすぐ君の配属先である湾岸署に着く予定だ。そこで君に”守って欲しい事”がある。」

「守って欲しい事？」

気になった部分をまるでオウムのように聞き返す。

「そうだ。」

「守って欲しい事とは？」

「これから君は、短い期間ではあるが正式に配属となる。その間、

”ガイアメモリ”の事は口に出さないでくれ。”

室井の言った「守って欲しい事」とは「ガイアメモリ」という単語を今後一切口にしないということだ。

タダでさえ今回の事件は、原因不明の幻覚症状を訴えるという摩訶不思議な事件。

情報規制を敷き、報道関係には一切漏らしてはいない物の、何故か某有名な掲示板では噂がちらほら出てきている。

そんな中、誰かが口にしてしまったら。

タダでさえここは大都市「東京」。

1200万人が暮らすこの都市で口にするばすぐに噂は広がってしまい、オカルトだと信じる人間は信じないだろうが、もし本気で信じてしまう人がいれば、そこから新たな事件が発生する可能性もある。

そういつた最悪の事態を考え、室井は照井にそう注意を促したのだ。

室井の言いたい事が分かった照井は

「分かりました。善処します。」

と頷きながら答えた。

それを聞いた室井は険しい表情を一瞬崩す。

どうやら彼なりの安堵な表情らしい。

「それから…」

更に何かを伝えだす室井。

「？」

まだ何かあるのかと、窓の方に向けそうになった首を再び室井の方へと向ける。

「君には刑事課の強行犯係についてもらう。」

「強行犯係？」

それを聞いたと同時に怪訝な表情を浮かべる照井。

無理も無い。

前の風都署では”超常犯罪捜査課”の課長。

しかし今回は刑事課の強行犯係。

つまり、課長ではなく係長としての配属。前よりかランクは下がっているのだ。

そういったことは気にしない照井だが、何も不祥事は起こしてはいないのに係長の降格。

あまり納得がいかないのだ。

だが、室井の口から告げられたのはそれよりもっと酷い現実だった。

「強行犯係では”青島警部補”の部下となってもらう予定だ。」

「!? なんだった!」

車内に大きく響くぐらいに大きな声で叫ぶ照井。

警部補といえば照井の階級”警視”から見れば2階級下。

そんな警部補の下に警視が就くだなんて聞いたことが無い。

照井は問い詰めようと室井の方へ身を乗り出すが、室井も彼の反応を予想していたらしく

「その方が君も動きやすいだろう。早く終わらせたいんだろ?」

そう、係長や課長など役職はいわば管理職に当たる。

ほとんどがデスクワークで部下に対する指示が多く、現場に立つ事はあまり無い。

それゆえ、今回の事件を早く終わらせるためには管理職ではなく、現場に多く立てる部下という役職の方が何かと機転が聞けるのではという室井なりの配慮だ。

だが、実際このようなことは絶対はないということをごここで明記させてもらおう。

室井の言いたい事を理解した照井は渋々頷き、シートにドカッと腰をかける。

納得はいつてないが、相手は自分よりはるか上の官僚。

そんな人に言われれば嫌でも頷くしかない。

モヤモヤな気分を心の奥底にしまいながら、照井は再び窓の外を見た。

すると車はいつの間にか高速から下りようとしている。

どうやら目的の場所に近いらしい。

そのまま車は高速を降りると一路、湾岸署のあるお台場へと向かっていった。

- - - 13:40 湾岸署 エントランス

照井と室井が湾岸署を目指している頃。

湾岸署のエントランスに3人の中年男性が並びながら歩いていた。

3人ともメガネをかけており、若干太っている。

湾岸署の署長「かんだ神田」総一郎「そついちろう」と副署長の「あきせま秋山 晴海」はるみ、そして刑事課長の「はかまだ袴田 健吾」だ。

この3人は仲が良く、いつも3人でいるところを目撃されている。

踊るシリーズファンの間では「スリーアミーゴス」の愛称で呼ばれている。

エントランスをプラプラと歩く3人。

時折「わはは！」と大きな笑い声が聞こえる事から談笑でもしているようだ。

そんな笑い声を聞くと周りの署員たちが振り返り、またアイツ等かという視線を送るが、すぐにその場から去って行ってしまふ。

正直、何に巻き込まれるか分かったモンじゃないからだ。

「いやあゝ、いい天気だねえゝ」

そんな周りの様子をお構い無しに能天気と言ったのは署長の神田。

「そうですねえ、流石は春。新人を迎え入れるには、持って来いの季節ですね。」

といったのは副署長の秋山。

今はまだ春と呼べる時期ではないが、ようやく春になりかけというところ。

もう時期この署にも新人が来る予定だ。

「新人といえは、そろそろ着く頃じゃないですか？確か今日でしたよね？」

今度は刑事課長の袴田。

たぶん、室井が連れてくる照井の事だと思っただが。

「…え？誰が？」

と神田が間の抜けた声で答えてきた。

「いや、誰が？じゃなくて。風都署から新しい刑事が来るって前  
上から言われてたじゃないですか。」

袴田は1週間前ぐらいに神田と秋山を通じてその事を知らされてい  
た。

「…」

「…」

だが、当の本人達の様子がどうもおかしい。

黙ったまま、額からは脂汗が。

拳句の果てには歩いてきた足まで止めている。

「もしかして、忘れてたとか？」

袴田が恐る恐る聞くと

「…なっ何馬鹿な事言ってるの？ははは、この僕がそんな大事な事。

ねえ、秋山君？」

「そっそうですとも。袴田君。私達がそんな大事な事を忘れるはずが無いじゃない。」

本人達は平然を装っているが、慌てているのは一目瞭然。

袴田は溜息を漏らした。

「ははは、もう。それで、どんな刑事が来るんだっけ？」

飽くまで誤魔化しながらそんな事を秋山に尋ねる。

「何言ってるんですか。”警視”ですよ”警視”。」

「ははは、そうそう。警視……”警視”？」

”警視”、その単語を聞いた間だの表情が強張ってしまっ。

「え？警視って…なんで警視？」

何故かうろたえ出す。

「いや、まあ…上の判断ですからねえ…」

詳しい事情の知らない秋山は曖昧な答えしか出せなかった。

「ねえ、何で警視なの？」

と今度は袴田の裾を掴み、揺すりながら尋ねだす。

「いや、なんて言うか。ああ、もしかしたら…世代交代かもしれませんね?」

「世代：交代？誰の！」

その答えに神田だけでなく、秋山、袴田の2人も交互に3人の顔を見合わせた。

3人とも血の気が引き、真っ青な顔。

というのも3人ともいい歳のおじさん。

いつ肩を叩かれてもいい頃合なのだ。

それゆえ今回の警視クラスの配属。

3人とも気が気じゃない。

すると神田、秋山の視線が自然と袴田に注がれる。

「…君じゃないの?」

「！ 私ですか!?!」

「だって君、青島君かれの件で結構色々やったからね…」

「いやいや、待ってください。まだそんな話聞いてもないですし、噂すらたつてませんよ?」

必死で自分ではないとアピール。

すると今度は秋山の方へ視線が注がれた。

「秋山君、短い間だったね。良く頑張ってくれた。君の事は忘れな  
いよ…」

泣き真似をしながら秋山の肩をポンツと叩く。

「はい！？私だって違いますよ！」

袴田同様に秋山も必死でアピール。

「じゃあ、誰なの？」

と神田が呆れるように言う。

「…」

「…」

いつの間にか袴田、秋山兩名の視線は神田へと向いていた。

「…私！？」

「署長、大変言いにくい事ですが…一番条件に当てはまっていますよ  
？」

と袴田から止めといわんばかりの一言。

「署長、たとえ辞められても、私は一生忘れません！」

こちらはさっきのお返しとばかりに泣き真似をしながら神田の方をポンツと叩いた。

「ちよっ！なに？私もまだまだ現役だよ！丸の内署の署長の夢だつてまだ…」

こちららも必死でアピール。

「そもそもね、警視が来るからつてえ、ほら、世代交代つてワケでもないでしょ！全く…ところで一人で来られるのかな？その警視…」

ふと気になったのかそんな事を秋山に尋ねて来る。

「いや、誰か連れてくるんじゃないですかね？」

「誰かつて？」

「誰つて…そりゃ…ねえ。」

誰だか分からない秋山は袴田に投げやるように聞いてきた。

「え？…本店（本庁）の方…だったり？」

「本店つて…じゃあ、お持て成ししなきゃ！」

この神田、今まで「警察の仕事はミスのない捜査とスキのない接待」をモットーとして仕事をしてきたため、今までこの湾岸署に来る本

庁の官僚や幹部にはスキの無い接客をしてきていた。

その為今回も来るであろう本庁の方に接待するために、事前に準備しようとしたのだ。

「あ、でも接待用のお菓子、切らしてますよ?」

副署長の秋山がいつもあるお菓子が無い事を思い出す。

「なら、袴田君。恩田君に”レインボー最中”買ってくるように言っといて?」

「はあ…でも、今彼女は盗難事件の現場に行っておりまして…」

「だったら、そのついでに買ってくるように置いてよ。」

「現場の仕事がいつ終わるか分かりませんか?」

「なら、ほら。彼は?青島君。彼なら暇でしょ?」

今は強行犯係が動くような事件が発生していない。

そうなるに係長の青島が手が空くと睨んだのだ。

「ああ、彼でしたら…でも先日の事件の報告書を纏めてるはずですが…。」

「ならチャチャッと買って帰ってくればすぐに出来るよ、そんなモノ。そうだ、頼む時は”特命”で頼むよ。その方が食いつき良いからね。彼は。」

神田はニシシと笑いながら袴田に伝えた。

「はあ、では。」

袴田は言われるままポケットから携帯を取り出すと、そのまま操作を行い青島の居る刑事課へと電話した。

――湾岸署 刑事課

署長の神田たちが楽しく談笑している頃、強行犯係係長の青島は自分のデスクにて、先日の事件の捜査報告書を纏めていた。

「…くっ」

区切りのいい所でペンを止め、背伸びをする。

そのあと肩が張るのか右手でトントンと左肩を叩いた。

「ハア… 始末書の次は報告書か。メンドクサイなあ…」

溜息を吐きながらそんな事を呟く。

青島にとって報告書は始末書以上に苦手なモノ。

始末書はむしろ書き慣れているため、面倒ではあるが幾分かはスラスラ書ける。

しかし、事件の報告書は書く機会がなかなか無い為慣れないでいる。

でも、今彼は係長。そういう書類がコレからドンドン増えていくので時期に慣れはすると思うが。

ちなみに領収書の精算は得意だ。

再び報告書の続きをやるうとペンを握り直した時だった。

p r r r r r r r r r r r !

デスクに置かれていた電話のコールが鳴る。

「はい、刑事課。」

受話器を取る。すると向こうからは聞きなれた声が。

「あ、課長ですか？なんですか？」

電話の相手はさっきエントランスに居た刑事課長の袴田からだ。

「え？今暇か？いやいや、そうでも…え？特命!？」

”特命”、その単語を聞いた青島は飛び上がるように椅子から立ち上がった。

彼にとってこういう捜査は大好きなのだ

「何ですか？特命って！まさかまた署長の浮気捜査ですか？良いですよ、やります！」

……湾岸署 エントランス

「いやいや、誰もそういうこと言ってないだろ…少しは落ち着きなさい。」

携帯の向こうで興奮する青島を抑えつつ、神田の方をチラッと見た。

「？」

神田は神田で何？という表情。まさかあの事をぶり返させるわけにも行かずに。

「誰かの身辺調査じゃない！」

……湾岸署 刑事課

「え？…」レインボー最中”を買って来い？」

特命の内容は実にシヨボイ物だった。

それを聞いた青島は、椅子にドカツと座り表情からも分かるようにあからさまにガツカリとした態度を取る。

「そのどこが特命なんですか？」

嫌そうな態度。

自分の想像とは違う内容に本当にガツカリしたようだ。

「いつもすみれさんに買わせに行くのに、何で今日は俺なんですか？…え？事件？…」

電話越しで袴田に恩田が盗難事件で居ない事を伝えられ、ふと恩田のデスクを見る。

「ああ、そっか居ないんだっけ、すみれさん。」

先ほど事件現場に出かけた事を思い出す。

「でも俺じゃなくても…え？俺が適任？何ですか、他にも適任者なら…ってちよつと課長？かちよ…切っちゃったよ…」

向こうから一方的に電話を切られた。

電話を切る間際、少しではあるが署長の神田、副署長の秋山の声が聞こえてきた。

それから考えるに多分

「本店（本庁）から誰か来るな…」

いつもの事。

本庁からの官僚などのキャリアが来ればあの3人はいつも接待だといってゴマをする。

「…ったく」

仕方ないとばかりに重い腰を上げ、椅子の背凭れに掛かっていたモスグリーンのモッズコートのスーツの上から着込む。

本当は行きたくないが彼の部下、緒方も篠原も、今は別件の用で席を外しているため居ない。

「息抜きついでだ。」

報告書で煮詰まっていたのも事実。

息抜きついでに言われたモノを買ってくることにした。

「あれ？青島君、どこか行くの？」

そう尋ねてきたのは「魚住 二郎」湾岸署警務課の課長だ。元々は刑事課の強行犯係の係長で青島との繋がりががあるため、こうして良く会話を交わしたりする。

「いえね、今から課長に頼まれたものを買に行くんですよ。」

「頼まれたもの？」

「レインボー最中。」

「はっはあく、また本店から誰か来るな…っていうか他に無いのかね？レインボー最中以外に。」

「さあ？じゃあ、行って来ます。」

「気をつけてな。」

――湾岸署 エントランス

「うまく行きました。」

電話をし終わると、誇らしげな表情を2人に見せ付けた。

”うまく行きました”というが、実際はあちら側に本来の目的がバ  
れている為、100%うまく行っているわけではない。

それでも、青島を動かした事は評価できるだろう。

「流石だね、袴田君。」

ご満悦な表情の署長、神田。

「それじゃあ、私達は準備でもしようかね。ねえ、秋山君。」

接待の準備をするため応接室に向かおうとするが、秋山の反応が返  
ってこない。

「秋山君？」

もう一度呼ぶが、また返事が来ない。

流石の神田もおかしいと思ひ彼の方を振り返る。すると、何故か彼  
はエントランスの玄関を見てガタガタ震えながら硬直しているでは  
ないか。

「どうしたの？ねえ。」

体を少し揺さぶるが、一向に硬直は直らない。

そんな時、一緒に隣で様子を伺っていた袴田が

「署長！あれ！」

とエントランスのホールに響き渡るぐらい大きな声をあげ、玄関のほうを指差した。

それに合わせてか秋山も震える腕で玄関を指差した。

「もう、なんなの？二人して……………」

釣られて玄関を見た神田。だがその直後彼も硬直した。

何故か。

答えは実に簡単だった。

何故なら、玄関の向こうには車用のターミナルがあるのだが、いつの間にかそのターミナルに1台の黒塗りの高級車が停まっているのだ。

それらしいその車を見た3人。

直感的に同じ事を考えた、”間違いない！”と。

そして、黒塗りの車のドアがゆっくりと開けられ、中から見覚えの

ある一人の男が出てきた。

「あの方は……」

3人にとって忘れるはずの無い男、ある時は自分達の障害となり、ある時は味方となった男。

「…室井」

「…慎二」

「警視監！」

その男は紛れも無く「室井」その人だったのだ。

そしてもう一人

「…誰だろうね？あの若いのは……」

室井についてくる形でこっちに向かってくる、赤い革ジャンを着た若い男が一人。

「もしかして、アレが新しく配属になる刑事では？」

と袴田が言うが

「いや、でも来るのは警視だよ？いくらなんでも若すぎない？」

「しかも革ジャンって……刑事としてダメじゃない？あれ。」

秋山、神田の二人はどうも彼は刑事ではないと見ているようだ。

そうこうしている内に、向こうの2人は入り口の自動扉を開け中へと入ってくる。

その間、玄関の立ち番はビシッと二人に向かい敬礼。

その偉さを伺わせる。

「お久しぶりです。神田署長に秋山副署長、そして袴田課長。」

3人に近づくと開口一番に挨拶を交わす。

「いや、こちらこそ！」

とビシッと立ち直す3人。

「お久しぶりです！室井警視監殿！」

秋山に関してはガチガチだ。

無理も無い、3人は本庁の誰かと予想していたが、まさかその上が来るとは予想していなかったのだから。

「崩してくれて構わない。逆に話し辛いですから。」

室井はやんわりと言った。

そうガチガチにされても彼には少々気が落ち着かないようだ。

「お気遣い、ありがとうございます」

多少肩の力を抜いた3人。それでもまだガチガチは残っているようだ。

「それで、今日はどついつたご用件で？」

室井は仮にも「警察庁長官官房審議官」。そんな人間が来たのだからそれなりの理由があるはずと神田は踏んだが。

「前に連絡が行っているはずだったが…新しく配属する刑事の話…」

「え？ええ、確か警視が…」

「そう、彼がその”照井 竜”警視だ。」

室井は後ろから付いて来ていた照井を3人に紹介する。

「よろしくお願いします。」

外見からして若く、そしてクールそうな男。

そんな男が3人に向かってお辞儀。

だが、3人はその瞬間硬直してしまう。

「け…警視？」

「あのお若いのが？」

「世代…交代…」

さっきの冗談話が段々現実味を帯びてきた。

「？」

3人の様子を見る照井。

彼にしては珍しく深々とお辞儀したつもりなのだが、一瞬”間違っ  
たか？”と思ってしまう。

「あの…」

不安になる照井は室井に何かを尋ねようとするが。

「また何か勘違いしているようだな…気にする事は無い。いつもの  
事だ。」

と質問の内容が分かったのかすぐに返してきた。

「はあ…」

”いつもの事”そのワードに照井は更なる不安を感じてしまうので  
あった。

…湾岸署 2階

湾岸署の2階、エントランスを望める場所にモスグリーンのモッズ

パーカーをスーツの上に着た青島が通りかかった。

「まったく、何で俺が。」

未だ納得の行かない彼はブツブツ文句を言いながらその場を通りかかった。

「あれ？」

エントランスの方を見ると見覚えのある男が神田たちと話しているではないか。

「室井さん？」

彼にとって室井は信用できる官僚。

青島は元来官僚の事をあまり良く思っていない。

実際、室井とも初めの頃は対立していた。

しかし、お互いを理解するようになってからは打ち解け、お互いを信頼しあうようになった。

室井も今、昔青島と交わした約束”所轄の刑事が活動しやすい組織作りと警察の改革”を実行するため「警察庁長官官房審議官」まで上り詰めたのだ。

室井の姿を見つけた青島は自然に体が動いた。

彼が昇進してしまい、なかなか会えることが無かったため、少し嬉

しい気持ちがあるのだ。

階段を一気に下りると

「室井さん！」

と彼の近くへ駆け寄った。

「お久しぶりです。」

「おお、青島。久しぶりだな。」

「はい」

室井の顔が少し緩んだ。彼も少し嬉しいようだ。

「青島？」

すると、隣に居た若い男が”青島”という名前を聞いて室井に尋ねてきた。

「そうだ、彼が君の上司になる青島警部補だ。」

「へ？」

話がどうも飲み込めない青島。

思い切って尋ねてみる。

「上司って…何の話ですか？」

「ああ、詳しくは知らないようだな。彼の名前は照井 竜警視。今日から”刑事課強行犯係”に配属される事になった。」

「へ？」

青島の、いや、その場に居た4人の思考回路が止まる。

「照井 竜だ。よろしく。」

握手を求めて来たので一応応じるが。

「「「「ええ〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜！！！！！！」」」」

エントランスのホールに4人の絶叫が響いた。

「ちょ、どづいづいことですか！？室井さん！」

「どづいづいことも何も、まんまの意味だ。」

「まんまって！」

もうレインボー最中どころの話ではない。

青島の頭の中は色々な事が混ざり合い、混乱寸前。

まず、自分の部下が増える事なんて知らなかった。それ以前に警視が警部補の下に就くと言うのは一体どういうことなのか。

「室井さん、正気ですか？」

「おそらく階級の話か？別に問題はない。上が決めたことだからな。」

「じゃ、彼は何か問題でも？」

「いや、実に優秀な刑事だ。君の部下には勿体無い位だがな。」

その言葉に一瞬ムツとするが。

「じゃあ、なんで？」

まだ納得の行かない青島。

だが、室井はそんな彼に落ち着いて

「今は詳しく話せない。だが、いずれ分かる時が来るはずだ。」

と答えた。

もちろん青島に分かるはずも無く。

「何言つて…」

「いいか、青島。今この東京に恐ろしい危機が迫っていようとしている。照井警視はそれを打開する力を持っている。…青島、彼から

離れるな。いいな？」

まるで警告のような言葉を青島に発し、

「それでは、照井警視をよろしくお願いします。」

「え？あ、はい……」

今まで硬直していてボーっとしている神田が力無げに答える。

室井はそれを聞くと踵を返しエントランスの出口へと向かっていく。

「ちよっと！室井さん！」

意味の分からない事が連発し、若干混乱気味の青島。

帰ろうとする室井を追いかけるが、室井を乗せた車は無常にも彼の前を通り過ぎていつてしまった。

「室井さん……一体どうしたって言うんだよ……」

どうしていいか分からない青島は、ただ呟く事しか出来なかった。

……湾岸署 刑事課

あまりの出来事が続いたため、神田と秋山の両名は意気消沈してしまい、照井への挨拶を終えたとお互い自分の部屋に戻ってしまった。レインボー最中の件もそのまま”やっばいい”といわれなかった事

に。

接待どころではなくなってしまったらしい。

仕方ないので袴田と青島は、照井の配属先が自分達と一緒に刑事課ということで紹介も兼ねて刑事かに戻る事にした。

3人が刑事課に戻ると盗犯係の恩田と係長の中西が事件から戻ってきていた。

「あ、お帰り青島君。」

「それはこっちの台詞だよ」

と力の無い返事を彼女に返した。

「? どうしたの?」

意味も分からず疲れ切っている青島に疑問を抱いた恩田。

しかし、彼は何も答えてはくれない。

未だ混乱しているみたいだ。

「? ハア、もうだらしない…」

だらけている姿を見て溜息を吐くのだった。

「ところであの子は?」

照井の姿にようやく気付いた恩田。今度はその事を尋ねてみる。

「ああ、今度ウチに配属される新しい子。」

「へえ、若くて結構イケメン。」

と若干39歳が少しはしゃぐ。

「大事な俺の仲間、食べないですよ?」

「誰が!…って仲間?」

「そう、強行犯係だって。」

「へえ、青島君の部下かあ。」

「しかも警視。」

「へえ、警視かあ……はっ!?警視!」

流石に食いついたようだ。

「なんで!?警視って若くない!?ってそもそもなんで青島君の部下になるのよ!普通逆じゃない!?」

恩だの言うことは尤もな意見。

「知らないよ、そんなの。」

とデスクに片肘を突き頭を抱える。

「分かった。それで疲れ切ってるんだ。」

「まあね。」

意地悪く笑う恩田を適当にあしらう青島。

実際それもあるが、青島が今悩んでいるのは室井が言った言葉。

”今この東京に恐ろしい危機が迫っていようとしている。照井警視はそれを打開する力を持っている。…青島、彼から離れるな。”

さつきから青島の頭の中をまるでエコーのように何度も繰り返し響いている。

「恐ろしい危機って何だよ…」

「ん？なんか言った？」

「いや、なんでも。」

考えていた事が少し口にしていたらしい。

恩田が気付いたが、青島は適当に誤魔化した。

すると

「ちよつと聞いているの！」

袴田の怒鳴り声が、どうやら少し五月蠅かった様だ。

「では改めて、照井刑事どうぞ。」

照井は袴田に促されるまま前に立ち。

「初めまして、風都署より配属されました”照井 竜”です。よろしくお願ひします。」

刑事課の皆に深々とお辞儀をする照井。

刑事課からは惜しめない拍手。

「君はまだここに来たばかりだからね。照井君、分からない事があったら彼にドンドン聞いてやってよ。」

と青島の方を指差した。

「え？」

「よろしく、青島警部補。」

照井が握手を求めて来たので応じる。

ガツチリとした手。見た目は20歳ぐらいなのに全然そうは思えない。

目も何か決意に満ちている。

「あっそうだ。」

ふと何かを思い出す。

「君の席は……」

そう照井のデスクだ。それが無いと彼は仕事が出来ない。

「えっと……あつ、あそこだね。」

良く見ると、昔青島が座っていたデスクにダンボールが何箱か積まれている。

もちろんダンボールにはカエルのマークが。

「あそこに座ってよ。」

照井は指示されるがままデスクに向かう。

すると

「ねえ、あの格好ってどうなの？」

恩田が話しかけてきた。どうやら照井の格好が気になるようだ。

「うーん、まあ、ファッションだし……」

「いいのかしら？課長も突っ込んでないけど。」

「アレはただ怖いだけ。なんせ室井さんが連れて来たからね。」

「そうなの？」

意外といった表情を見せる。

「うん、来てたよ。」

「今あの人つて警察庁長官官房審議官でしょ？そんなことまでするの？」

「さあ…するんじゃない？」

青島自身もそれは疑問に思っていたこと。だが、あまり深くは考えなかった。

タダでさえ、ワケの分からない事に巻き込まれているだけに、これ以上考え事を増やしたくなかったのだ。

「あっそつだ、報告書…」

さつき中断した報告書をデスクの上に出す。

「その報告書、まだ終わってなかったの？ずいぶん前なのでしょう？」

横から覗き込んで来た恩田が呆れながら言ってきた。

「仕方ないじゃん、得意じゃないんだからさ。」

「始末書はスラスラ書けるのにね。」

もちろん皮肉を込めて。

「うるさいなあ……」

せっかく集中して書こうと思った矢先にコレ。

レインボー最中の件が無ければもう少し早く書き終わったのかもしれないと悔やむ。

「ハアーツ。」

深い溜息を吐いた。

そんな時だった。

「青島警部補、少しいいか？」

「ん？」

見ると照井が話しかけてきていた。

「どしたの？」

「いきなりで申し訳ないんだが、1週間前の暴行事件についての資料は何か無いか？」

それを聞いた青島は「どうしてそんな事を知ってるんだ？」と初めは疑問に思うが。

丁度その事件の報告書を持っていたため。

「ああ、だったらここに報告書があるから。コレでよければ。」

「？ 1週間前の事件だよな？」

照井が疑問に思ったのは無理も無い。

1週間前の事件なら、もうとっくに報告書は出していてもおかしくないのだ。

それなのに今書いている。

「まあまあ、色々あるんだよ。」

と明るく誤魔化す青島。

「そう…か。でも、借りていたら青島警部補が書けないのでは？」

「いや、いいよ。後で返してくればパパッと書きちゃうから。」

といつもの調子で言う青島。

「そうか、では借りていく。ありがとう、青島警部補。」

「あのさ、その呼び方変えてくれない？」

「？ 何故？」

「ううん…なんて言うかさ、他の皆も”青島”とか”青島さん”で通ってるからさ。堅苦しくして。」

”警部補”を付けられるとどうも性に合わないらしい。

そのことを照井に伝えると。

「分かった。では改めて…ありがとう、”青島”。」

「そうそう、そうやって…っていきなり呼び捨て!？」

最近の若い子って何て図々しいんだと、青島が思ってしまったのは言うまでも無い。

青島から報告書を受け取った照井は、自分のデスクに戻り内容を確認する事に。

だが、読み始めて数秒。彼はすぐに頭を抱え込んでしまった。

(何て報告書だ…)

前にも話したが、青島は報告書が苦手。それゆえ書くのも下手なのだ。

課長である袴田もコレにはいつも頭を悩ませているぐらいだ。

そんな報告書を四苦八苦しながら読み始める。

そんな様子を恩田が見つけ

「ねえ、何であの子頭抱えてるのよ…何書いたのよ?報告書に。」  
と問い詰めるように耳打ち。

「え？別にいつも通りだよ。1週間前の事件を事細かに…書いている”筈”。」

「なによ…”筈”って。」

再び呆れる恩田であった。

一方その頃の照井はというと。

青島の報告書を四苦八苦しながら読み進め大体のことは理解できた。幸いにも内容がつかめる程度には纏められているため何とか読みきり理解までいけたのだ。

「しかし、書いてあることはあの資料と一緒にだな…やはり、もっと材料が必要だな。」

ここに書かれていることは事前に室井から貰った資料となんら変わりが無い。

これだけで「ガイアメモリ」と決め付けるにはまだ早い段階だ。

フリリップを使えば手っ取り早いのだろうが、風都からは遠く離れており、電話だけでは伝えきれない部分もある。

何より、ワードが少なすぎるため検索を使うのは不可能だ。

とりあえず報告書を青島に返すことにした。

「すまない、青島。コレを…」

「ああ、何か役に立ったかい？」

「いや、コレだけでは…」

「…ねえ、この事件を追ってるの？」

「え？」

青島の思いもよらぬ質問に、思わず間の抜けた声を出してしまう。

「やけに詳しいからさ…なんか大きな事件とか？」

下手に言えば室井との約束がパアに。

兎に角、話を誤魔化す事にした。

「さつき車に乗っている時に室井警視監から聞いたんだ。最近謎の暴行事件が多発してると。同じ刑事課に配属されるのだから少しぐらいは知っておかないとな。」

この程度で誤魔化せるか不安だったが。

「なるほど、熱心だねえ。聞いた？すみれさん。」

「ほんと、どっかの誰かさんに爪の垢を煎じたい位ね。」

恩田はいつの間にか作っていたカップ麺を啜りながら青島の言葉に答える。

「どっかの誰かって誰よ…まさか俺？」

「さあね。」

コレで誤魔化したと言って良いのか、凄く不安な気持ちにはなるが、結果的には成功のような気もする。

そんな事を照井は思ってしまう。

「しかし、騒がしい刑事課だな。」

自分の居た「超常犯罪捜査課」の面子とは違い、また違った騒がしさを持つ面子。

ここで無事に過ごせるか不安になる照井であった。

- - - 3月21日 17:00 海浜公園

ここは先日、暴行事件が起こった海浜公園。

その周囲をジョギングする一人の男がいる。

春になりかけの時期とはいえ、肌寒い季節。防寒用にウィンドブレーカーを着てジョギングしている。

そんな男がこの公園のシンボルでもある「自由の女神像」の近くを通りかかった時である。

「？」

女神像の近くにある茂みに何かあるのを確認し、近寄ってみる。

その時だった。

そのあるものを確認した男はいきなり腰を抜かしたように尻餅を突き、後退り。

「あ…あ…あ…あ…ひいひい！！」

立ち上がると、そのまま走り去って行ってしまった。

彼が見たもの、それは…

…同時刻 湾岸署 刑事課

風都署から送られてきた荷物を片付け終えた照井。

今は自販機の前で小休憩。

買った温かい缶コーヒーを口にしながらこれからの事を考える。

まずは、自分のやるべき事をやる事。

いくら自分が「ガイアメモリ」のために呼ばれたとはいえ、他の事  
件を蔑ろには出来ない。ないがし

出来れば起きて欲しくは無いのだが。

いつの間にか飲み干してしまった缶コーヒーの缶をゴミ箱に捨て、自分のデスクへと戻る。

強行犯係の列には青島と、その部下の緒方と篠原。

盗犯係には係長の中西、部下の恩田が座っていた。

他にも知能犯係の面々や暴力犯係の面々が残っている。

照井にとってはここまで面子の多い課は初めてだ。

それだけにやりにくい部分もある。

「どうしたの？そんなとこに突っ立って。」

青島が入り口に立っている照井を見つけ声を掛ける。

「いや、この刑事課を眺めていただけだ。」

「そう。」

そんなに珍しいかな？と青島は思うが、前の所属が違つのかもと考えた。

「そういえばさ、風都ってどんな場所？」

デスクに腰をかけた照井に恩だが問いかけてきた。

「どんな場所？」

「うん。聞く話じゃエロの街だよね？」

「ああ、そうだな。街のあちこちに風車が回ってるな。」

「なんか洒落てるね。」

興味津々の恩田。

「すみれさん、照井君困ってるじゃん。」

照井の様子を見て止めに入る青島。

「いいじゃん別に。興味ないの？青島君は。」

「興味ないわけじゃないけどさ……」

その時だ

ビーー！ビーー！

事件を知らせるサイレンの音。

「警視庁から入電中！警視庁から入電中！港区台場1丁目海浜公園内、自由の女神像付近で胸を刺され死んでいる男性が発見された模様！繰り返します……」

それは警視庁からの殺人事件発生を知らせる放送。

「青島君！」

課長の袴田が声を荒げる。

「はい！現場に行きます！みんな！」

「はい！」

青島が支度を始めると部下の緒方、篠原もそれに合わせ支度を始める。

「俺も行ったほうがいいか？」

とりあえず指示を仰ぐとする照井。

いつもなら、自分勝手に出勤するがそれは風都での自分。

今は湾岸署の照井なので下手な動きは出来ない。

「当然！」

青島からの答えはシンプルではあったが自分の望んだ答えだった。

「照井君も行くよ！」

「ああ、了解！」

照井も椅子にかけてあった赤い革ジャンを羽織るとそのまま刑事課を飛び出していった。

照井にとって着任早々の事件。

まさかこの事件が後に彼らを苦しめる事になるとは、この時、青島  
たちに知る余地も無かった。

つづく

## 1話 Tの到着／湾岸署と最初の事件（後書き）

照井「青島、お前にとって特命とはそんなモノなのか…？」

青島「へ？なんで？」

照井「特命と言ったら、もっとこつ…何と言つか…」

青島「まあ、良いじゃん。」

照井「良いのか？」

青島「多分。」

右京「特命と聞いて黙って居るわけには行きませぬねえ。」

照井・青島「え？」

はい、というわけで第1話満を持しての投稿です。

そして「にじファン」に移行しての初投稿になりますね。

ええ、待っていた読者の方々申し訳ありません。

スラスラ書きたいんですが、やっぱり刑事モノは今までとジャンルが違うからストーリーを良く練った上で書かないと後で大変な目にあってしまうので…。

不定期更新ってこういう意味でもあるんです。

しかし、まだ1話（実質的にはプロローグなので0話？）だけで1  
28 pt...。

これは期待させすぎなのか？

まあ、クロスさせてるのがビッグネーム同士だからね。

無理もない。

でも途中で諦めたりはしないんで安心してください。

ハア、次回は事件発生と本店の方たちの来襲...うまく書けるかな？

ああ、スツゴイ緊張してきた。

とりあえずまた間が空きますが、次回をお楽しみに！

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5366m/>

---

踊る大捜査線×仮面ライダーW THE NOVEL 「Aの転属 / 史上最悪の1週間」

2010年10月14日09時12分発行